

私の紙面批評

下北ジオパークサポーターの会長 小田桐 隆夫

隆夫



△おだぎり・たかお
協会理事。17年に下北ジオパークサポーターの会を結成し会長に就任。住民向けの勉強会や、見どころとなっているジオサイトの清掃活動などを行っている

7月2日、朝刊1面に、あっと驚いた。

「G20に風間浦アンコウ／夕食会で首脳舌鼓」。美しく盛りつけられた風間浦村産アンコウの唐揚げの写真が、輝いて見えた。

豊かな海の恵みは、本州最北の特徴的な形の半島と海流のおかげだ。今回、20カ国・地域首脳会議（G20大阪サミット）という晴れの舞台に登場したのは、資源を大事にしてきた漁師や関係者たちの苦労が実った証でもある。今度の冬、恒例の「風間浦鮫鱈まつり」は、さらににぎわうだろう。

地球のダイナミックな活動から生まれた、まさ

かりの「大地」（ジオ）の素晴らしさ、自然の豊かさや厳しさの中で暮らしを営んできた先人のすごさ。

そんなふるさとを幅広く学び、もっと好きになって自慢していこうと、下北ジオパークサポーターの会を2017年に結成し、活動を重ねてきた。だから、風間浦アンコウの輝きはともうれしく、誇らしい気持ちになった。

7月掲載分 海が教えてくれること

マとして話し合われた。

21日付朝刊「時流時論」

は、日本が世界の廃プラ対策の先頭に立たなければならぬと訴えた。

サポーターの会は、下北半島の中で、特に珍しい地形・地質が観察できるジオサイトの清掃活動に取り組んでいるが、漂着する海洋ごみではプラスチック製品が目立つ。そして日本製が圧倒的に多い。ポイ捨てが原因なのだろう。

海の環境を守ろうと各地で汗を流す人たちがいる中で、勇気づけられたのは、15日付朝刊「スポGOMI甲子園」の記事

だった。

高校生によるごみ拾いイベントの県大会で、本県での開催は初めて。青森市の合浦公園海水浴場が会場だった。

スポーツ感覚を取り入れ、たばこの吸い殻やペットボトルが高得点になるなど、ごみの種類別に点数を設けている。優勝を目指すには、他のチームより長い距離を歩く体力が必要になってくる。こうした工夫が、関心を高め、参加者を増やしていくのだろう。

学校自慢のコーナーは、西田沢小学校（青森市）の地引き網体験を紹介した。 「取れた魚は地元の漁業者らに生態や調理方法を解説してもらい、児童がじかに触って観察する時間も設けている。魚を家庭に持って帰って食べられるまでが学習の一環だ」海がいろいろなことを教えてくれることに、あらためて気付かされた。 今からでも遅くはない。みんなの力で、海洋ごみ「ゼロ」を目指す取り組みを考えていきたい。

27日付朝刊「わたしの